

全明全共斗結成を大衆的に勝ち取り

改革委＝自主改革（規制）路線を粉碎せよ。

現在、70年を前に十四決戦が叫ばれ、そこから逆規定されるというの明大徹底抗戦が将来的な展望の大落したまま各セクトによって提起されている。

又昨年末以来学園斗争の政治斗争への昇華が斗争過程の中から必然的に

論理的進展を明確にする中で語られるのではなく、学園斗争が校力との全面

的な決戦に至る、その双方との決戦を平行して、いかにしてしか学園斗争

の勝利を展望し得るか、と、う課題が提出されている。』

勿論、現在の学園斗争が政治斗争としてよりは所轄斗争（の質的）の発展を

展望し得る、として展望されていなければ否定しない。だが、学園斗争の政

治斗争の領域への発展をして、全共斗の街頭斗争への進出、そして学園斗争の相対

的比重の減少を見るには出来ない。

我々斗争主体に対して自己の存在基盤に対する問題設定とそこに対する

校力關係の徹底して破壊が要求されてる。そして、全共斗運動として出現して

来たところの斗争主体の問題意識を発展させ、但別校力の打倒を明確に追求す

る中で、所轄斗争への展望を見出しして行なない限り、広汎な大衆運動として

の全共斗運動の質的取扱は得られないのである。

我々は以上のようないくつか、から明大斗争を政治主義的引き回しないにはセクトの利

害の問題としてしか把握し得ない、各政治セクターを批判しなければならない。又但別

明大斗争の位置付けと方針を何らかに提申し得る、またはセクト的発想のみによって

全明全共斗を下す上での諸君の自己批判を要すまいはずはない。

又我々は但別大学校力打倒を強力に推進する組織として全明全共斗の結

成を、学内諸所の終戦闘線として形にして勝利を取って行なはねばならぬ。

東大斗争、日大斗争に類似の見込みのよう、我々の提示した問題を一つ理解す

ることなく、学生管理支配機構を制度的に改革することによって、より合理的に学生

支配を実現し得る、とする学内当局の深謀遠計徹底的粉碎すると共に、大學院資本制の

補完物としての学部・院・研究所商團としての再生産体制、元オロキの再生産の復興を、

思惟的、も、制度的、機械的にも操作する斗争を展開しなければならない。今后の我々の

斗争は明大における動搖の加深と学内校力構造の破壊を明確に指向しなければ

ならない。それが今、必ずや秋の初めに付けて中から斗争を行ふに限り全共斗運動

が、課題への対応は獲得せんが、たゞ、そこにはかつてかの中から十月斗争と積極的に斗争を継続的な斗争を展開して行かなければならぬ。